



国立研究開発法人
国立がん研究センター
東病院
呼吸器外科長
坪井正博 先生

名医に聞く がんの予防と治療

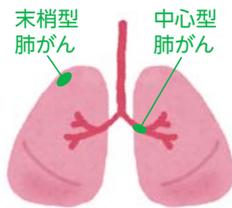
日本人のがんによる死亡原因のトップで、さらに増加傾向にある肺がんは、意外なことに、たばこを吸っていなくてもかかることがあります。肺がん治療がご専門の坪井先生に肺がんの予防と治療についてお伺いしました。



肺がん

Q1 肺がんはどんな病気ですか？

A 肺がんは、発生部位により、肺の入口近くの太い気管支にできる中心型肺がん、肺の奥のほうにできる末梢型肺がんに分けられます。中心型肺がんの場合、早い段階で「せき」「たん」「血痰」などの症状が現われることが多い一方、末梢型肺がんは、がんがある程度の大きさになるまでほとんど自覚症状が現われません。**非喫煙者(とくに女性)に多い肺腺がんは自覚症状の出にくい末梢型なので、注意が必要です。**



肺がんの主なリスク要因

- 喫煙
- 受動喫煙
- 遺伝
- 食生活(アルコール、脂肪の過剰摂取)
- 環境的要因
(飲料水中のヒ素、アスベストなど)

Q3 肺がん治療にはどのようなものがありますか？

A 肺がんの治療法には、手術、放射線療法、抗がん剤などの薬物療法などがあり、がんの種類や進行度、全身の状態などを総合的に検討して決められます。手術は治療効果の高い方法ですが、切除する範囲が大きい手術のあとには息切れなどが起こりますので、術後に呼吸機能がどれだけ残る可能性があるかが、手術を行うかどうかの判断の基準になります。いずれの治療法を選択するにせよ、早期に発見できれば、リハビリ等次第で通常の生活を大きく損なうことなく、治療を受けることができます。

Q2 肺がんのリスクを減らすことはできますか？

A 喫煙者の方には、なんといっても禁煙をおすすめします。禁煙により、自分の肺がんリスクを減少させるだけでなく、周囲の人を受動喫煙による肺がんから守ることができます。また、定期的に肺がん検診を受けて、がんを早期に発見できれば、身体への負担の小さい治療法を選ぶことができる上、死亡するリスクも減ります。**喫煙の有無にかかわらず、40歳以上は、毎年肺がん検診を受けましょう。**



肺がんに関する検査

- 胸部X線検査
…40歳以上は年1回の受診をおすすめ
フィルムに映し出された影などをチェックして肺の状態を調べる。末梢型肺がんの発見に有効。ただし、骨や心臓などに重なる部分ではある程度の大きさにならないと発見できません。
- 低線量胸部CT検査
…55歳～74歳の重度喫煙者におすすめ
海外の臨床試験結果から55歳～74歳の重度喫煙者ではCT検査を毎年受けると肺がんによる死亡が20%減ることが示されています。また、CT検査による肺がん発見率は胸部X線検査と比べて約10倍程度高く、早期肺がんの比率も高いことが知られています。ただし、CT検査ではがんではない陰影をみつけてしまう過剰診断があります。
- 喀痰検査
…50歳以上で喫煙指数(1日の喫煙本数×喫煙年数)が400ないし600以上の人、もしくは40歳以上で6ヶ月以内に血痰のあった人は受診。
痰の成分を調べます。中心型肺がんの発見に有効。